

だ れ の や り 方

信仰によって、人々が七日の間エリコの城の周囲を回ると、その城壁はくずれ落ちました。

ヘブル 11 : 30

今日の力

御茶の水キリストの教会

6月5日(火)

主のためだ。ギデオンのためだ。

聖書朗読 申命記7：8～21

「私と、私といっしょにいる者がみな、角笛を吹いたなら、あなたがたもまた、全陣営の回りで角笛を吹き鳴らし『主のためだ。ギデオンのためだ』と言わなければならない。」
士師記 7：18

聖書の中のあらゆる物語には、物語の霊的な意味を探索する1行があります。聖書の作者は、物語の背景にある目的を理解する手がかりを私たちに残しています。マナセ人と、荒廃したミデアン人、アマレク人との間に続いている争い、つまり『主のためだ。ギデオンのためだ』がその1行です。

それは、敵を打ち負かす偉大な軍の指導者ではなく、主に従う勇士を描くために、聖書の物語があることを私たちに教えてくれます。偶像礼拝が広まり、軍事的脅威が迫り、大勢の敵の派遣隊が押し寄せているときにあっても、ギデオンの思いは神様に集中していることを、この1行は語っているのです。

このことが私たちに教えてくれるのは、信じられない文化やあらゆる種類の脅威にさらされ、注意しなくてはならない細かいことがたくさんある今日であっても、私たちはギデオンを見倣いましょうということです。「常に主のため」ということを忘れないようにしましょう。

讃美歌 501

祈り 親愛なる主よ。みことばを正しく解釈するよう、私たちを導いてください。常に「主のため」であることを覚えることができますように助けてください。

イエス様の御名において。アーメン。

ハロルド・シャンク

ウェストヴァージニア州 ヴィエナ

6月6日(水)

稀有なヒーロー

聖書朗読 士師記 16：1～9

こうして、彼の力のもとでは知られなかった。
士師記 16：9

士師記16：1～9に書かれているようなヒーローを見つけるのは難しいことです。確かに、サムソンは、彼を自分たちの手に渡すようにとデリラを買収したペリシテ人のヒーローではありませんでした。また、自分のことを愛している人をだましたデリラのヒーローでもありませんでした。さらに、サムソン自身にとってのヒーローでもありませんでした。サムソンは、敵であるペリシテ人をあざけり、だましたあとで、一人の女性と仲良くするためにペリシテ人の領土に入り、自分の故郷をあとにしました。サムソンのようなヒーローではなく、本物のヒーローの方、どうぞ立ってください。

でも、しかしです。ペリシテ人によって捕らえられ、拷問され、投獄されあと、士師記16章の最後の箇所では、サムソンは、ダゴンに神殿で連れて来られました。そして、はしゃいでいるペリシテ人の見世物になりましたが、そのあとで、サムソンの祈りに、神様が答えになられました。サムソンは、ペリシテ人の邪悪な行ないに対する報いとして、神殿をペリシテ人全体と自分自身の上に倒しました。

こうして、サムソンは、神様がご自身の命令を実行する者として用いられた、聖書に登場する稀有な人物の仲間入りをしました。出エジプトのアブラハム、父イサクをだましたヤコブ、不貞を犯したダビデ、臆病者のペテロ、脱走者のヨハネとマルコ——そしておそらく私やあなたもその中に含まれます。

神様だけが腐った木の手入れをすることができ、
神様だけが足が不自由な馬を乗りこなすことがおできになります。

—— マルティン・ルター

讃美歌 第二編 188

祈り お父様。これまでに、多くのあなたのしもべを用いられ、変えられてきたように、今日、みこころを行なうために私を変え、備え、用いてください。

イエス様という強い御名においてお祈りします。アーメン。

ポール・ワトソン

ノースカロライナ州 ダーラム

6月7日(木)

どんな状況にあってもお仕えする

聖書朗読 ルツ記 2:1~17

奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。 I ペテロ 4:11

奉仕ということを考えるなら、他人に手を差し伸べる前に、自分自身が「慣れ親しんだ芝生」の上において、自分の生活をきちんと整えなければならいと考えがちです。

しかし、旧約聖書のルツ記では、外国人の若い未亡人が自分にできる最善のお仕えをして、さらに人に奉仕するためにすべきことを、どんな小さなことでもすすんで行ない、また惜しみなく分け合います。

彼女は奉仕したり、手を差し伸べたりできるほど、自分の生活が十分整うのを待つことはありませんでした。奉仕とは、神様が豊かに備えてくださる力によるもので、自分がすることは神様をご信頼し、お頼りすることだということが、ルツにはわかっていました。

自分自身や自分の必要を超えて、「状況は不十分ですが、困っている人に今日、奉仕するために、私には何ができますか？」と神様にお尋ねしましょう。

讃美歌 第二編 169

祈り 主よ。自分が抱えている問題で消耗し過ぎて、まわりで困っている人に気づかないようなことがありますように助けてください。自分の状況にかかわらず、人に奉仕する強さを与えてください。

イエス様の御名を通してお祈りします。アーメン。

ジャン・ノックス

テキサス州 グランベリー

6月8日(金)

自らを勇気づけるために

聖書朗読 I サムエル 30:1~30:6

しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った。 I サムエル 30:6

クリスチャンとは半ば本能として、他人に希望、勇気を与えるように行動するものです。しかし今回の聖書箇所でダビデはそうではなく、むしろ自らを勇気づけているのです。友達、特に主にあって兄弟姉妹である人達がいることは幸いなことです。彼らは私たちが失意のうちにあるとき、寄り添って元気づけてくれます。しかし時には、そんな友達が近くにいない時があるのかもしれませんが。時には友達から忘れられたと感じるかもしれません。時には友達から見捨てられたと思うかもしれません。得てして、人生は厳しいときほど、孤独なものなのです。

ダビデは自らを勇気づけました。いったいどうすればそんなことが出来るのでしょうか。秘訣は聖書にあります。『ダビデは彼の神、主によって奮い立った。』ダビデは困難を、悲しみを、失敗をすべて神様にささげたのです。ダビデは自分の居場所を神様の御手の内に定め、永遠で不変であるその場所にとどまることで大きな勇気を得ることができたのです。神様はこの時確かにダビデの支えとなってくださいました。そしてそんな神様が今では私たちの支えになってくださっているのです。他の人に助けを頼むことは大事でしょう。しかし本当の助け、心の導き手は神様であることを、皆さん、どうか覚えておいてください。

讃美歌 525

祈り 天にいます愛する神様。私たちは友人や教会にいる兄弟姉妹たちに助けられています。そんな彼らを与えてくださったことを感謝いたします。しかし真に困難にぶつかったときに拠り頼み、隣にいてくださるのはあなただと知っています。この恵み、愛に感謝いたします。この事実を忘れずに日々歩めますように。アーメン。

ジャン・ノックス

テキサス州 グランベリー

6月9日(土)

あなただに報いる神

聖書朗読 Ⅱ列王記 4：1～4：44

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、———あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——— エペソ 2：4～5

Ⅱ列王記4章に出てくる女性は名前こそ聖書には書かれていませんが、シュネムに住み、優しく、もてなし上手な人だったと書かれています。そんな彼女はエリシャが岨に来るたびに、彼を招いて夫も含め三人で食事をしていました。

やがて彼女はエリシャのために部屋を屋上に用意することになりました。彼女は『旅人をもてなすことを忘れてはいけません。』（ヘブル 13：2）をまさに体現したような女性だったのです。

エリシャは彼女の温かい歓待に感謝して、何かお返しをしたいと考えました。しかし何を言っても「満足しているので大丈夫です」と彼女が固辞するので、エリシャが自らの従者に相談すると、従者は彼女には子どもがいらないし、きっと子どもが出来ることを求めているだろうと答えました。もちろん神様のみが彼女に子どもを与えることが出来ます。しかしエリシャは預言者として彼女が一年以内に子どもを産むだろうと預言しました。そしてその言葉どおりに彼女に子どもが与えられたのです。

この話は決してお返しにまつわるエピソードなどではありません。これは神様が報いる者としての性質を持っていることを表しているのです。神様はこの真実を私たちが知ることを求めておられます。神様は私たち全員に報いてくださるのです。

この事実は私たちの不安を解消し、勇気を与えてくれます。神様は与えてくださる方です。私たちが神様を信じれば、たくさんの豊かな賜物が与えられます。

讃美歌 543

祈り 父なる神様。私たちが日々、あなたを信仰できる恵みを感謝いたします。私たちに日ごとの糧を与えてくださっていることに感謝いたします。
アーメン。

ジェイムス・ウッドロー
カリフォルニア州 レドンド ビーチ

6月10日(日)

マナセでさえ

聖書朗読 Ⅱ歴代誌 33：10～33：13

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

ヘブル 4：16

この世界には小悪党や大悪党がいます。北イスラエル王国と南ユダ王国の歴史を紐解いたとき、そこには英雄などほとんどいません。大半の王たちは見るに堪えない過ちを犯しています。その中でもマナセは最悪です。彼の悪行の数々はⅡ列王記21：1～18に書かれています。彼はまじないを学び、神殿に偶像を持ち込み、多くの無実の人を殺し、自らの息子さえ異教の神のためにと殺したのです。神の怒りを最も買ったのは、このマナセをおいてほかはいないでしょう。

バビロン捕囚後、歴代誌著者が改めてユダヤの王たちについて語ったのは、神が正しく誠実な方であることを教えるためだけでなく、神が根気強く、そして尽きせぬ愛を与えてくれる方であると教えるためでもありました。マナセはアッシリアに捕らえられ、屈辱と恥辱にあふれた生活を送ることになります。そんな失意の中、彼はついに真実の神により頼みます。その祈りを神はお聞きになったのです。マナセはその後イスラエルに戻ることができ、その後の統治は以前のような間違ったものでなく正しいものとなりました。神は王国をお見捨てにならなかったのです。

私たちクリスチャンは皆、神の恵みが生きていくうえで必要であると認めています。しかし私たちは神様の意思に反している世界中の人たちを憐れんで、彼らが立ち返るように祈っているでしょうか。神の恵みはまさに驚くべきものです。マナセさえ立ち返ったのです。この世界に神様が愛さない人なんて誰もいません。

讃美歌 第二編 167

祈り 恵み深き私たちの神様。私たちが私たちの敵のために祈れますように。あなたの御心に背いている人たちがいつの日かあなたに立ち返ることが出来ますように。アーメン。

エアル・D・ラベンダー
テネシー州 プレントウッド